

3. 都市計画マスタープラン見直しの視点

前回の都市計画マスタープラン策定後の社会経済情勢の変化や本市の諸施策の動向をふまえ、都市計画マスタープラン見直しの視点を次のように設定します。

(1) 拡散から集約へ～身近な生活圏の重視～

前回の都市計画マスタープランは、本市の恵まれた自然環境や交流拠点性を活かしながら、今後も人口増加が続くことを前提に、都市の拡大に対応できる都市構造の構築をめざしてきました。しかし、我が国は人口減少、超高齢社会を迎えるという大きな時代の転換点にあり、本市においても今後、人口は緩やかに減少し、少子高齢傾向が長期的に続くものと予想されます。

一方、都市を取り巻く状況は、モータリゼーションの進展等を背景として、病院、学校、行政等の公共公益施設の郊外移転や大規模集客施設の郊外立地が進み、都市機能の拡散が進行しています。

そこで、これまでの都市の拡大成長を前提としたあり方を転換し、市街地の拡散的な拡大や都市機能の郊外流出を抑制し、高齢者も含めた多くの人々にとっての暮らしやすさを確保するため、様々な都市機能が集積する身近な生活圏を重視した都市づくりを進めていくことが必要です。

(2) 自然環境への配慮と既存ストックの有効活用

都市における自然環境は、そこに暮らす人々に安らぎを与え、温室効果ガスの発生やヒートアイランド現象を緩和するとともに、災害時における避難所や避難路等を形成するなど防災性を向上させています。また、自然とふれあい親しめる多様なレクリエーションの場であるとともに、野生生物の生息・生育環境であり、これらの自然環境によって実感される四季の変化は、我が国固有の文化形成に重要な役割を担っています。

今後の都市づくりにおいては、身近な自然環境の果たす役割を再認識し、環境負荷の軽減やインフラ投資の効率性の向上、都市の運営コストの縮小等の観点から、これまでの都市の既存ストックを有効に活用しながら、既成市街地の再構築や防災性の向上を図り、安全で安心な都市づくりを進めていくことが必要です。

(3) 地域資源の活用と多様なライフスタイルへの対応

近年、身近な自然や地域の歴史、文化などに対する人々の関心が高まり、地域資源を有効に活用し都市づくりに活かしていくことが求められています。

特に、本市にはたぐいまれた美しい自然景観、歴史・文化遺産が多数あることから、これらの地域資源を守り後世に伝えていくため、市民一人ひとりが地域の魅力を認識し、市民との協働による美しい都市景観づくりを進め、住まう場所として、また魅力ある観光地としてそれぞれの地域の価値を高めていく必要があります。

また、価値観の多様化にともない、居住、就労、その他のライフスタイルに大きな変化が生じており、住宅の都心回帰がおこる一方で二地域居住に代表される田舎暮らしに対するニーズが拡大するなど、人々の住宅に対する認識にも変化がみられます。

本市は、別荘やリゾートマンション等二次的住宅の立地が進んでいますが、今後も四国と本州の結節点であるという地理的優位性や豊かな自然環境を活かし、首都圏や京阪神地域における新しいライフスタイルを持つ人々を地域活力の担い手として積極的に受け入れていくことが必要です。